

「リアルな時代」としての現代日本 ——1990年代以降の「リアル」言説の形成と流行——

Contemporary Japan as “real age”:
Formation and prevalence of “real” discourse since the 1990s

田 中 大 介
TANAKA Daisuke

【要旨】戦後日本を代表する社会学者である見田宗介は、戦後日本の社会意識の変容を「理想の時代（1945-1960）」、「夢の時代（1960-1975）」、「虚構の時代（1975-1990）」として整理した。この図式はしばしば参照され、「虚構の時代」のあとはどのような時代かについてもさまざまな形で論じられてきた。たとえば「不可能性の時代」、「動物の時代」、「拡張現実の時代」などの説が提案され、見田自身も「バーチャルの時代」という説を提示している。ただし、上記の図式は、「+」の意味がある「理想」から、一般的には「-」の意味で理解できる「虚構」への推移として整理されており、そこには「リアリティの解体」という趨勢命題が前提とされている。

その一方で、1990年代以降、「リアル」という用語の利用頻度が急増している。本論では、1990年代以降、流行語のように用いられるようになった「リアル」という用語の内容と推移を分析する。そのなかで、「リアル」言説が——「理想」や「夢」と機能的に等価に見える——規範的な位置におかれていくプロセスを明らかにする。こうした考察を通して、1990年代後半以降、いわば「リアルな時代」と表現できそうな現代日本の様相が現れてくることを示唆したい。

1. 問題設定——ポスト虚構の時代とは？

1.1 戦後日本の社会意識——見田宗介の三分説をめぐって——

戦後日本を代表する社会学者である見田宗介は、戦後日本の社会意識の変容を、三つの時期に区分した¹⁾。① 1945年から60年までの「理想の時代」、② 1960年から70年代前半までの「夢の時代」、③ 1970年代中頃から1990年までの「虚構の時代」である。その際、理想、夢、虚構というそれぞれの言葉は、「現実（リアリティ）」の反対語として位置付けられている（表1）。

現実	現実の反対語
ブレ高度成長（1945-1960）	理想
高度成長（1960-1975）	夢
ポスト高度成長（1975-1990）	虚構

表1

ブレ高度成長期にあった「理想の時代」における「理想」とは、敗戦後の日本がよりどころとしたアメリカン・デモクラシーとソビエト・ коммуニズムという二つのイデオロギーである。とりわけ前者（American Way of Life）がもたらす物質的な豊かさであった。

しかし、1960年の日米安保条約の改定とそれに対する闘争の敗北によって東西二つの「理想」が終わりを告げる。このとき政治的なイデオロギーの「理想」は潰えたものの、その一方で、産

業資本主義により経済的な高度成長は達成された。ここで現れたのは、産業都市化と核家族化が進むなかで生活の豊かさや家庭の幸福に憧れ、それを実現していこうとする「夢の時代」であった。

その後、1973年のオイル・ショックによって高度経済成長は収束し、生活の豊かさや家庭の幸福だけを素朴に夢見る時代も終わる。ポスト高度成長期になると、資本主義を持続・展開させるなかで消費社会化や情報社会化が進み、「虚構の時代」へ移行する。その結果、家族はゲームのような関係になり、商品は情報として生産され、現実メディア越しに理解されるようになったという。見田は、その象徴的空間としてディズニーランドの開業を挙げている。このきわめて人工的なテーマパークに代表される同時期の都市空間は、リアルなもの、ナマなもの、ダサイものの、キタナイものを排除し、カワイイもの、オシャレなもの、キレイなもので埋め尽くそうとした。そのため虚構の時代は、「^{リアリティ}現実自体の非・現実性、『不・自然性』、虚構性」「リアリティなんかないというのがリアリティ」という感性が広がった。

…理想の時代は、また「リアリティ」の時代であった。虚構に生きようとする精神は、もうリアリティを愛さない。1980年代の日本を、特にその都市を特色づけたのは、リアリティの「脱臭」に向けて浮遊する〈虚構〉の言説であり、表現であり、また生の技法であった（見田 1995：11）。

この「理想→夢→虚構」という鮮やかな時代区分、そして同時代を「虚構」であるとする触発的な論調は、後の社会学者や評論家に大きな影響をあたえた。見田本人もそうした図式を前提としながらみずからの作品を出版し続けた。1990年代に出版した『自我の起源』と『現代社会の理論』という二冊の書物のあとがきで、見田は以下のようなメッセージを発している。この二冊の書物は、「虚構の経済は崩壊してたといわれるけれども、虚構の言説は未だ崩壊していない」（真木 1993：197）時代に、「アクチュアルなもの、リアルなもの、実質的なものがまっすぐに語り交わされる時代を準備する世代」（同上：197、見田 1996：188）に向けている、と。こうした教導的なメッセージを発する見田は、戦後日本における社会学のカリスマであった。

戦後日本は「理想」や「夢」というポジティブ（+）に表現されるものの現実化を求めたが、次第にその現実化を放棄し、「虚構」という一般的にはネガティブ（-）に表現されるものを志向するようになった——このように見田の議論を要約できるとすれば、そこには強い前提がおかれている。つまり「リアリティの解体」という疎外論、あるいはオプティミズムからシニシズムへという衰退史観である。佐藤俊樹（2010）が指摘する「解体」論の図式のひとつといえる。「夢」にはプラスとマイナスのどちらにもなりうる両義的な意味があるとすれば（大澤 1996：39）、「理想（+）⇒夢（0）⇒虚構（-）」という変化として理解することもできるだろう（表2）。このように現実の

現実	現実の反対語	
	プラスの意味	マイナスの意味
プレ高度成長（1945-1960）	理想	空想、妄想など
高度成長（1960-1975）	夢	悪夢、幻など
ポスト高度成長（1975-1990）	？	虚構

表 2

反対語として採用された言葉である「理想・夢・虚構」には、価値評価の違いが存在しており、そのズレは「リアリティの解体」という「解体」論の図式で補填されている。

「人びとはもはや理想や夢を現実化することをやめ、虚構を愛するようになった」と指摘する場合、その発話者は「真の現実」を知りうる側におかれている。「リアリティの解体」という論理も、いわば「本物」とよべそうなリアリティがかつて存在した、あるいはそれが疑われていなかったことが前提となる。

しかし、ポスト高度成長期以降、人びとはポジティブなものを求めなくなったのだろうか。また、現実やリアリティを求めなくなっているのだろうか。以下で指摘するように、そのような理解と逆行するように、1990年代後半以降、「リアル」という用語が一種の流行語になっている。そこで本論では、現実とは区別される形で用いられてきた「リアル」というカタカナ語の形成と流行について分析することで、ポスト「虚構」の時代とはどのようなものなのかを検討したい。

1.2 乱立する「〇〇の時代」——ポスト「虚構の時代」をめぐる——

これまで、見田の三分区をめぐる多くの解釈と継承が試みられてきたが、その重要な焦点のひとつは、「虚構の時代のあとは何の時代なのか」であった。

たとえば社会学者の大澤真幸は、理想と夢を集約し、「理想の時代」（1945-1975）としたうえで、「虚構の時代」（1975-1995）のあとの時代を「不可能性の時代」と位置付けている²⁾。「不可能性」とはどのような事態なのだろうか。大澤の議論や用語は難解だが、以下のように説明されている。

…「現実」へと向かっていく逃避が、現代を特徴づけている。ただし、この場合の「現実」とは、通常の現実ではない。それは、現実以上に現実的なもの、現実の中の現実、「これこそまさに現実！」と見なしたくなるような現実である。すなわち、極度に暴力的であったり、激しかったりする現実へと逃避している、と解したくなるような現象が、さまざまな場面で見られるのだ（大澤 2008：4）

ここでいう「現実」は、リストカット、テロリズム、ハルマゲドン、残忍な殺人や戦争といった暴力への志向や、身体を直接刺激するような虚構的なゲーム、アニメなどへのアディクションを、具体的には指している。大澤によれば、人びとはこうした極限の暴力や強烈な刺激によって、「現実」を取り戻そうとしている。

ただし、ここにはひとつのパラドクスが存在する。一方では、虚構の時代がすすむにしたがい、危険性や暴力性を除去し、現実を極端に虚構化する「反現実」の度合いが高まっている。しかし、他方で、暴力的で危険な「現実」への欲望も噴出している。このように矛盾した「現実」は、直接、体験や対象にならない「不可能なもの」である（同上：165-166）。そして、その「不可能なもの」が表しているのは、現代社会に生きる人びとの〈他者〉への希求と忌避という両義性である、と結論付けられている（同上：192）。

一方、評論家の東浩紀は、直接には（1996年時点の）大澤の「理想の時代」から「虚構の時代」という議論を受けて、ポスト虚構の時代を「動物の時代」として提示している（東 2001）。ここで分析対象になっているのは「オタク」（とりわけ1980年前後に生まれた第三世代のオタク）とよ

ばれるアニメやゲームを愛好する人びとである。東によれば、オタクたちは、アニメやゲームの作品、物語、世界観ではなく、そこで登場するキャラクターを愛でている。キャラは情報として構築されたシミュラクルであり、オタク文化で蓄積された要素や設定のストック＝データベースの組み合わせによって構成されている。オタクたちは、作品の世界観やストーリーよりもこうしたデータの配列に耽溺するようになる。この「データベース消費」とよばれる行為は、動物的な欲求の次元にまで迫っており、東によれば現代社会は「動物の時代」と表現できる、という。

そのほかにも、評論家の宇野常寛は、情報技術におけるAR (Augmented Reality) という用語を用いて、ポスト虚構の時代を「拡張現実の時代」とよんでいる(宇野 2011)。宇野によれば、現代社会の情報環境として定着したインターネットやモバイルメディアなどのデジタルデバイスは、現実を拡張するようにして用いられている。たとえばソーシャルメディアは、現実の人間関係を拡張・強化する役割をもっているし、位置情報ゲームなども現実を上書きするようにして楽しられている。

見田もまたポスト虚構の時代をめぐってゆらぎを見せている。2000年代に「虚構の時代のあとの時代とは？」と問われた見田は、「バーチャルの時代」と答えていた。しかし2012年には「バーチャルの時代は虚構の時代の深まった形」であり、無理に高度成長をつづけようとするれば虚構の時代であらざるをえないとも述べている(見田 2012: 58-59)³⁾(表3)。

このように、これまでいくつもの「ポスト虚構の時代」が語られてきた。ただし、いずれも(1)現実に対するしっくりした反対語になっていないうえ、そのほとんどが(2)日常語として定着している表現になっていない。たとえば、「拡張現実」や「バーチャル」という言葉は、情報テクノロジーの開発や普及の場面で用いられていた、どちらかといえば工学的表現で、よく知られてはいるが日常語とまではいいにくい。また、「不可能性」という概念も哲学的・思想的含意の強い言葉で、日常語として扱うことは難しいだろう。その点、「動物」という表現がもっとも理解しやすいが、現実の反対語というわけではない。こうしたことを考えると、見田の論理と表現がいかに優れていたかが逆照射される。

現実	現実の反対語	
	プラスの意味	マイナスの意味
プレ高度成長 (1945-1960)	理想	空想、妄想など
高度成長 (1960-1975)	夢	悪夢、幻など
ポスト高度成長 (1975-1995)	?	虚構
現代社会 (1995-)	動物、不可能性、バーチャル、拡張現実	

表3

では、上記の二つの困難を避けるような表現は存在するのだろうか⁴⁾。たとえば、大澤がいう現代社会における「現実への逃避と極端な虚構化」(大澤 2008: 165)というパラドクスをさしあたり解決できそうな表現がある。「現実」という言葉と微妙に区別することができる「リアル」というカタカナ表現である。もちろん「現実」と「リアル」もくっきりとした反対語にはなっていな

いし、かなりあいまいな区別ではある。

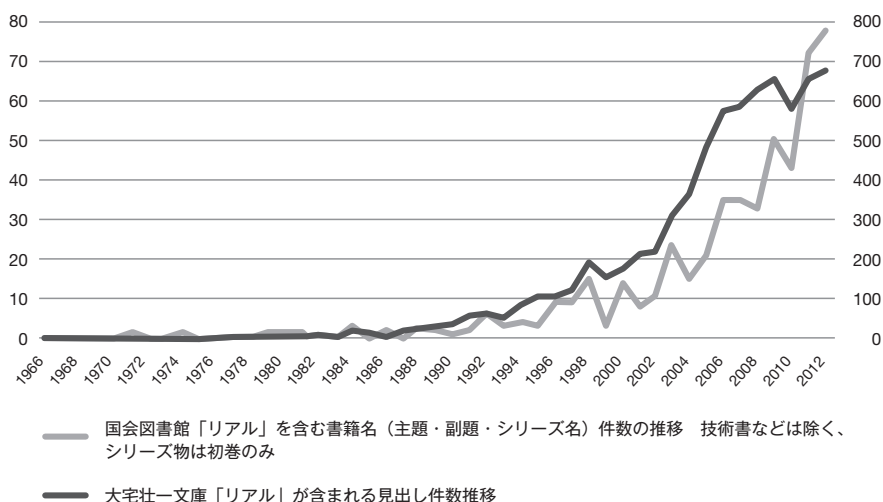
しかし、「現実」と「リアル」という語感を比較すると、前者には「これが現実だよね」という諦念や峻厳さがある一方、後者には「これってリアルだよね」という願望や期待に似た広がりがある。リアルが実際の現実でなくともいい点も重要だろう。テレビを見ていても、ゲームをプレイしていても「リアル!」といえる。虚構であれ、現実であれ、また人工的であっても、自然のものであっても、「実感」や「ありそうなこと」を示すことができるのである。このように「リアル」は、工学的な概念を使わず、またこなれない哲学的な概念も避けながら、それらを含む言葉として用いることができる。なにより「リア充」といった言葉があるように、「リアル」の充実はうらやむべき／ねたむべき「+」の状態でもある。したがって、「リアリティの解体」という「解体」論を前提条件に置かなくてもよい。もちろん「リアル」という用語については、上記の論者の提示する用語の内容と論理的に重なる部分も多い。ただし、ここでは「現実」に対する用語としての機能的等価性を重視しつつ、日常的にもよく使われ、一種の流行語となっている言葉を扱うことにしたい。

2. 「リアル」言説の分析

2.1 「リアル」言説の量的推移

「リアル」という言葉がいつから、どの程度、どのように使われるようになったかを分析するため、大宅壮一文庫の記事見出し検索と国会図書館の書籍タイトル検索を用いて、経年推移を調査した。どちらのデータも「エディトリアル」、「メモリアル」などのリアルを含むワードは取り除いた数値である。また、後者は、主題・副題・シリーズ名を含めているが、技術書（「リアルタイムシステムの構築」など）は除き、シリーズものは初巻のみを換算している。どちらのデータベースも母数の経年変化をコントロールすることが難しいが、そうした留保をつけたうえでの件数推移の調査結果は以下のとおりである（表4）。

表4 「リアル」言説の推移



「リアル」という言説は、書籍タイトルに用いられる例は少ないものの、1980年代に徐々に雑誌記事の見出しとして現れる。その後「リアル」言説は、1990年代後半に、書籍名としても、雑

誌記事の見出しとしても増加する。そして2000年代以降、爆発的に増加し、現在に至っている。

以上の推移をふまえると、1980年代に「real」という英語が「リアル」というカタカナ用語として用いられはじめたということがわかる。1990年代になると「リアル」というカタカナ語は、雑誌記事の見出しのみならず、書籍のタイトルとして用いられることが増えはじめ、特定のテーマの主題を表現する言葉として普及する。そして、2000年代以降、「リアル」と銘打った記事・書籍の爆発的増大により、「リアル」という言葉が一種の流行語として流通していった様子がうかがえる。

大宅壮一文庫に収蔵されている雑誌には、大衆雑誌・週刊誌などを含む市販される一般紙が多く、「リアル」言説でヒットした雑誌も同様であった。また、国会図書館で検索したタイトルも、市販されている一般書や一般向けの専門書、および漫画ほとんどである。その意味で「リアル」という言葉は、書籍・雑誌の売上に貢献する、あるいは一般読者の感覚にフィットすると期待されて用いられてきたと考えられる。だとすれば、2000年以降の「リアル」を冠した記事・書籍の爆発的増加は、「リアル」が「表現すべき／したい」、「追及すべき／したい」、「知るべき／知りたい」、「楽しむべき／楽しみたい」ものとして、出版業界や一般読者の欲望の対象になっていったことを示している。「リアル」には一種のメディア的な商品価値があると察知され、それを期待して「リアル」言説を生産・消費するサイクルが現れる。こうして「リアル」という言葉は2000年代以降、増大していったと考えられる。

「リアル」が見出しやタイトルとして付与された言説の意味やジャンルは、さしあたり以下のように分類することができる。(1)ドキュメントとしてのリアル：特定の性別、年齢、職業、地域、アンダーグラウンドやエロティックな領域の実録物、告白物、潜入記、体験記、レポート。(2)アートとしてのリアル：特定のアーティストや作家が表現したい、表現すべきと考える現象や作品。特定のメディア技術や表現技法による迫真的な再現の形容。(3)スタイルとしてのリアル：より日常生活に即した、身近で身の丈にあったファッションやライフスタイルの表現。(4)マニュアルとしてのリアル：わかりやすく、実用的なハウツー、解説、手ほどきを形容する表現。(5)(アンチ)テクノロジーとしてのリアル：高度な視聴覚技術や情報ネットワーク技術に媒介された世界の迫力ある経験や、逆にそれと対照化された「現実」の経験の表現。「リアル」という言説は、使用量が増大する過程で、その意味を分岐させたり、重層させたりしながら、定着してきた。

以上の推移と分類を作業仮説として用いながら、以下では「リアル」言説の内容分析を行う。

2.2 「リアル」というレトリック——副詞・形容詞的用法の普及

大宅壮一文庫の見出し検索で「リアル」が最初にヒットするのは『読書人』の1966年の「リアルな基礎に」というものである。ここでは、児童文学における表現の根本に、生態学・生物学的な弱肉強食や食物連鎖をおくことを「リアルな基礎」とよんでいる。ただし、1970年前後に目立つのは、アンダーグラウンドな領域におけるセクシュアリティやエロティシズムの表現であり、煽情性をかきたてるための形容として「リアル」が用いられている例である。

たとえば、水商売の女性を目的とした東北旅行のエッセイが「リアルが売りもの東北の夜」(『週刊大衆』1971・7・22)というタイトルで掲載されている。また、篠田正浩監督の心中ものの強烈なセクシュアリティを表現した作品のレビューが「リアルで幻想的な心中死」(『キネマ旬報』

1969・6・1)と題され、性教育テキストの過激さを訴える記事が「大久保事件が生んだ性教育テキストのリアルな実例」と題されている。この時期の「リアル」という用語は、セクシュアリティやエロティシズムの過激さを表現していたようである。

その後、1970年代後半になると、「リアルすぎるマネキン」、「リアルなスーパーアクション」、「リアルすぎる残酷映画」といった、造形物、作品、作家、俳優の迫真性を形容するために「リアル」という言葉は用いられている。また『ニューミュージックマガジン』などの音楽雑誌においては、「アフリカのリアル」や「NYのリアル」といった表現や「ストラングラーズ リアルな日常」といった見出しがつけられており、現在も用いられるアートやスタイルの表現としての「リアル」が先駆的に用いられている。ただし、趣味性の強い読者層をもつ海外についての記事や雑誌が中心である。また、多くの場合、「リアルな」や「リアルに」といった副詞や形容詞として用いられており、特定の現象や表現の迫真性や事実性を強調するレトリックであった。

さらに1980年代後半になると、新しいメディアやテクノロジーによる表現に対して「リアル」という言葉が使われるようになる。「現実以上のスーパーリアル」(『GORO』1988・9・8)「超リアル ハイテクポルノ」(『週刊大衆』1988・10)、「超リアル映像」(『宝島』1989)、「CD音源のリアルな音」といった表現がでてくるように、「リアル」はメディア・テクノロジーと対立するというよりも、メディア・テクノロジーを通してより強く表現されるものであることがわかる。ただし、「超」、「スーパー」、「ハイパー」、あるいは「現実以上」といった強調は、「現実の強化」を表現しているともいえるし、「現実を超えた虚構」を表現しているともいえる。たとえば『朝日ジャーナル』(1988・1・22)には「貧困な現実を反映し、映像に過剰なリアルを追求するTVゲーム」という表現がみられる。

1970年代における「リアル」という言葉の使用は、全体としての数量がかなりすくない。また、その用法も、生物・動物的な現実の表現、あるいは身体的・性的な現実の煽情的な表現として用いられている。したがって「リアル」という用語は、アンダーグラウンドな領域で使用された過激さを表現する素朴なものだったといえるだろう。しかし1980年代前後になると、アートに関連する記事のなかで、現実をより迫真的に表現する副詞・形容詞として用いられるようになる。さらに1980年代後半以降、メディア・テクノロジーを通じた「リアル」が追及されはじめた。こうして「リアル」は、その使用量は多くないものの、ただの現実とは異なる領域、あるいは現実以上の現実を表現する際に用いられるようになった。

2.3 「リアル」の主題化——名詞・目的語的用法の定着

1990年代になると「リアル」の使用量は増加しはじめ、それまでの用法をふまえつつ、新たな表現が増えてくる。たとえば、「バブルからリアル」へと副題がつけられた「ポスト・バブル大不況は来るのか」という記事(『SPA!』1992・2・12)では、不況感が漂う中、人びとの消費が「バブル消費」から「リアル消費」へシフトしつつあるという。また、電通マーケティング局が発表した1992年を表すキーワードである「リアル」を紹介する記事もある(『プレジデント』1992・2)。個別の事象のみならず、マクロな経済状況などを含む「時代」を包括する大きなキーワードになりうる用語として用いられていることがわかるだろう。

とくに1990年前後に目立ちはじめるのは、「リアル」を名詞的に目的語として用いる用法であ

る。たとえば「リアルについて」(『ヘルメス』1989)という記事や「いま、リアルということ」(『群像』1990・3)といった対談があり、書籍としても『子どもという不安——情報社会の「リアル」』(1993)、『リアルであること』(1994)が出版されている。「リアル」の副詞・形容詞的用法から名詞的用法への分岐は、「リアル」が形容されるべき対象から遊離して、それそのものが対象として自立したことを表している。そして、論文や対談、書籍の主題としてとりあげられているように、「リアル」はただの対象であるのみならず、「探求の対象」になっている。ただし、この時期には、「について」、「ということ」、「であること」といった言葉が付随しており、「リアル」を名詞として用い、探求の対象にすることが自明ではなかったことがうかがえる。この時期における「リアル」の対象化・主題化は、自覚的にあえて採用されたカッコ付きの表現であった。

さらに1990年代後半以降、「リアルの追求」(『芸術新潮』1993)、『マンガ的リアル』を追求(『SPA!』1996/2/21)、「リアルさを追求」(『JUNON』1998/7)といったように、名詞化された「リアル」を、「～の追求」、「～を求める」というかたちで目的語として表現する例が増加する。また、「○○のリアル」というタイトルも『新世紀のリアル』(1997)、『“子ども”というリアル』(1998)が出版されたあたりから増加し、2000年代に定着した。このころになると、個別の論文や記事のなかで名詞的に用いられるだけでなく、一冊の書物のタイトルとして採用されることが珍しくなくなる。もはや「リアル」は、カッコを外して名詞や目的語として用いることにためらいを感じないほど自然な用語として定着する。

とりわけ、「リアル」を主題的にとりあげたのは、作家やアーティスト、批評家や評論家などの人びとであった。たとえば1999年の『文学界』12月号では、「90年代日本文学決算報告書 激論座談会『リアル』は取り戻せたか」という座談会が組まれている。この座談会では、1990年代は小さな物語が作られ、「社会的に閉域を再構築して、逆にリアルなものが隠蔽されていっている」が、1995年の阪神大震災や地下鉄サリン事件、97年の神戸の少年殺人事件で、「解説できないリアルなものが危機的にあらわになった」とされる。そして、「リアル」なものが——ジャック・ラカンが用いた概念である「現実界」を並置しつつ——文学的表現の現代的課題として位置付けられている。そのほかにも「イメージからリアルへ」というタイトルのもとにアーティストの日比野克彦を紹介する記事もある(『中央公論』2000・8)。

以上のように、「リアル」言説は1990年代を通して増加し、名詞・目的語として用いられることが一般化した。そして、「リアル」は人びとの探求や追求の対象として立ち現れ、同時代を包括するキーワードとして語られるようになったのである。

2.4 「リアル」の多重化

2000年代に入ると「リアル」言説は爆発的に増大し、「○○のリアル」というタイトルが定着したが、その内容にはいくつかの特徴がある。まず、「リアル」という言葉の微妙な屈折の明示的な表現として、「現実」と「リアル」を区別して表現する言説が現れる。

たとえばアニメ作家の今敏のインタビュー記事は「写真とリアルは違うことだから」(『広告批評』2002・5)とタイトルがつけられる。そのなかで今敏は「写実的なこととリアルなものは違う」と思っています。写実的に描いたからといって、リアルになるとは絶対に思わない。…中略…リアルって描きうるものじゃなくて、見る人がそこに発見するものだと思うんですね。つまり作品

との関わりの中で、個人個人の体験が反映されたうえで感じるものがリアルで、だからお客さんの感情を刺激する描写のほうが、遥かにリアルにつながる気がするんです」と述べている。また、ジャーナリスト石丸元章へのインタビュー記事のタイトルにも「現実と虚構の狭間にあるリアル」という表現がある（『FRaU』2004・6・8）。

また「メディア社会のリアルと非リアル」（『創』2005・5）と題された座談会記事では、以下のように語られる。グローバルな通信環境とインターネットの普及などの「メディアが発達する一方でリアルさが失われていく」時代においては、リアリティショー、ドキュメントバラエティなどにみられるように、「普通のドキュメンタリーをそのまま見てリアルだと感じるのではなく、やらせの果てに起きたハプニングを初めてリアルとを感じる」。そして、座談会のメインテーマである土屋豊監督の映画「PEEP “TV” SHOW」は「メディア社会に生きる我々にとってリアルとは何なのか、という問い」を突き付けている、という。

「メディア社会のなかでリアルが失われる」という紋切り型の言説とは対照的に——あるいは、そうであるとされるがゆえに——「リアル」という言葉は、「現実」から切り離されながら、体験されるべき・表現されるべき「対象」として肥大化していく。ただし、「リアル」の追求は、ジャーナリストやアーティスト、メディア関係者などのみによって重視されたわけではない。むしろ2000年代の特徴は、そうした志向が、より日常に近い大衆的な広がりをもったところにある。

たとえばこの時期、「○○のリアル」というタイトルの記事・書籍が増えていくが、「○○」に入る言葉が、特定の属性の日常生活を表現するものになる。『結婚のリアル』（2002）、『女のコのリアル』（2002）、『28歳からのリアル』（2003）、『若者のリアル』（2003）、『17才のリアル』（2004）、『U35世代のリアル』、あるいは『定年後のリアル』、『60歳からのリアル』（2010）などである。ファッション関連の記事でも「リアルクローズ」、「リアルファッション」という——すでに1990年代に存在していた——言葉が頻繁に用いられるようになるのもこの時期である。

また、特定の職業・職場、あるいは階層に関する体験物や告白物やレポートものもひとつのジャンルとなっている。たとえば『デイトレのリアル!』（2006）、『OLたちのリアルな日常』（2006）、『派遣のリアル』（2007）、『中学教師裏物語-知ってるようで知らない中学校のリアル、教師+生徒+親の生態』（2008）、『貧困のリアル』（2009）などである。

また、書籍や漫画単行本のシリーズ名として「リアル」が用いられ、いわば「リアルシリーズ」ともいうべきジャンル横断のカテゴリーが現れる。「リアル・ホラー・コレクション」、「ボプラ・リアル・シリーズ」、「BFリアル・ラブ・コレクション」、「リアルインテリア」シリーズ、「リアルドリーム文庫」、「リアルライブ」などを挙げることができるが、逆に「アンリアルコミックス」というシリーズも存在する。2009年には『REAL NIKKEI Style』もはじまっている。

「リアルシリーズ」に関連して、「リアル就活本」シリーズも2000年代後半にはじまったが、マニュアル本やハウツー本のタイトルとして「リアル」を表記するものも増加している。語学系では『リアルな英会話』、『実用リアル・モンゴル語』、『中国語リアルフレーズ』といった書籍が出版されている。『借金社長のための会計講座 教科書では教えてくれない! 超リアルな決算書の読み方&作り方』、『超リアル営業戦略』といったビジネス本にも「リアル」を冠するタイトルが増えている。

また、情報テクノロジーの進展と関連した「リアル」言説も継続している。「サイバー」、「ヴァー

チャル」、「ネット」といった言葉で表現された情報空間と「リアル」を区別しつつ、それらが融合しはじめたという語り口が、とくにビジネス業界で多く語られる。ここまで来ると、「リアル」とは端的に商品であり、市場を勝ち抜く元手＝資本のひとつになる。

2000年代における「リアル」言説ブームは、複数の傾向のなかで発生している。まず、①「リアルの大衆化」ともいうべき傾向である。1990年代以前の「リアル」は、アーティストや有名人などの「特別な人びと」の知られざる自伝・伝記に用いられていた。また、作家・評論家などの知識人が追求すべき対象であった。しかし2000年代以降の「リアル」は、特定の階層・世代・属性の「一般の人びと」の日常生活のレポートを指すようになる。これに関連して、②「リアルの日常化」という傾向が現れる。とくに世代・階層・属性を区別し、それぞれのカテゴリーに所属する人びとの経験や実態の情報価値を示すために「リアル」という言葉が採用される。そこには、一枚岩の「現実」とは異なる、多様な人びとが体験・表現する多元的な「リアル」が存在するという含意がある。また、③「リアルの競争化」ともいうべき傾向もみてとれる。ここでは、「格差社会」や「市場競争」という当時話題となっていたコンテキストのなかで、「勝ち組」や「負け組」の過酷さや残酷さも表現されている。この傾向は①②の一般の人びとの経験や日常生活に緊迫感を与えることになる。さらに、それと連動するようにして、④「リアルの実用化」ともいうべき用法が加わる。就活本にとりわけ顕著だが、その他のマニュアル本、ハウツー本も「リアル」を冠しはじめる。ここでの「リアル」は、探求の対象というだけではなく、その知識が現場で実際に使えるものであるべき——ひいては競争に勝てるもの——であることが強調されている。最後に⑤「メディアとリアル」用法の展開である。メディア・テクノロジーを超えたリアルであれ、メディア・テクノロジーと融合するリアルであれ、メディア・テクノロジーとの関連で「リアル」なものが重要視され、強調されることになる。

3. 「リアル」をめぐる多重的振動——リアリティ番組の流行と「リア充」——

ここまで書籍・雑誌を中心とした活字メディアを中心にした「リアル」言説の内容と変化を分析した。では、テレビなどのマスメディアやネットメディアはどうだろうか。2000年代以降、目立つのは「リアリティ番組」の流行だろう。

アメリカから発生した「リアリティ番組」は、1950年代のクイズ番組や1960年代の恋愛系ゲーム番組、あるいはドキュメンタリー番組やドッキリカメラなどを重要な先行者としつつ、1990年代に流行しはじめたジャンルとされる (Lindemann2021 = 2022 : 12-14)。リアリティ番組の定義は難しいが、多くの場合、「俳優ではない人々 (ただし再現映像では俳優をつかうこともある) が参加し、(なんらかの“台本進行”が実際にあるかどうかにかかわらず) 現実 (リアル) であると主張するが、番組のおもなねらいは情報伝達ではなく、娯楽」 (同上 : 15) である。とくに1992年からMTVで放送された『The Real World』がそのはしりとなり、2000年に放送された『Survivor』がジャンルの定着に決定的な役割を担った (同上)。このようなリアリティ番組、あるいは「リアリティショー」は2000年以降、急スピードで世界各国において量産」されていったという (村上2020 : 11)。

では、こうしたコンテンツやジャンルを含めた「リアル」言説の急増は、何を意味しているのだろうか。ここではリアリティ番組を素材のひとつとして、メディアの「リアリティ」を理論的

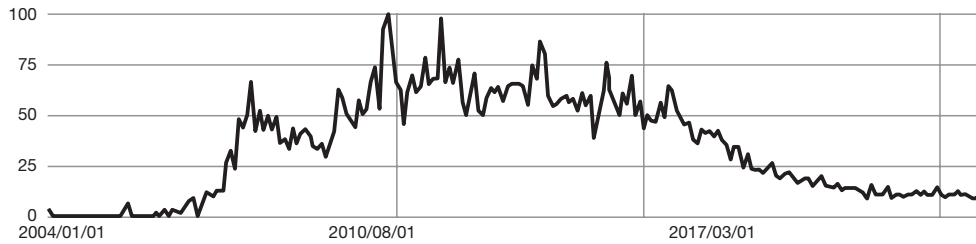
に考察した遠藤知己(2003)の鋭利な分析が有用だろう。まず、遠藤はN・ルーマンを援用しつつ、「メディアが映し出す世界」と「メディアの受容者の世界」、すなわちディスプレイの「あちら側」と「こちら側」が重なりつつ、微妙にズレながら存在するマスメディアの形式を「二重現実(ダブル・リアリティ)」とする。そして、この二つの領域のあいだで「リアルである／ない」が判定され続けることによって、「現実世界に対する過剰と過少としてのリアリティ感覚」(同上：70)が現れるという。つまり「メディアの世界」と「ユーザーの世界」のあいだにズレがあるため、「これはリアル」、「あれはリアリティがない」という判定がくりかえされる。こうして、より「リアル」な感覚が追求されることになる。そして、それを判定する特権的な立ち位置が成立しなくなれば、「虚構と現実」を判定する視点も乱反射し、それぞれの「リアル」が語られはじめ、「リアル」言説はさらにインフレーションを起こすだろう。遠藤の議論をこのように理解するなら、「リアル」言説の増加は、こうした機軸の帰結と考えることができる。

ただし、日米のリアリティ番組の形成プロセスには違いもある。欧米で大ヒットしたリアリティ番組『Big Brother』は、ケーブル回線を通じて視聴者投票を行わせて、その「リアルさ」に没入させていた。一方、日本においてはリアリティ番組という呼称は同時期には定着していない。『恋愛観察バラエティーあいのり』、『電波少年』、『ASAYAN』などのテレビ番組は、当時似たような形式をもった「ドキュメンタリー・バラエティ」と呼称されている。つまり、マスメディアという一方向的な伝達経路を維持しつつ、「バラエティ≒笑い」というお約束でラッピングし、ディスプレイの「あちら側」と「こちら側」を安全な形で分離していたのである。

しかし、2012年に『テラスハウス』が日本型リアリティショーとして放送されて以降、「恋愛リアリティショー」が一つのジャンルとして定着する。『テラスハウス』はソーシャルメディアを駆使することで、番組・出演者と視聴者、そして視聴者と視聴者を双方向で結びつけることを試みた。その結果、「SNSの世界においては、『テラスハウス』の“リアル”と彼らの活動の“リアル”に境目はなく、視聴者は番組を視聴する以上に高い熱量で出演者と結びついていく」(同上：26)。こうして、SNSにおけるコミュニケーションの「近さ」のイメージを通して、「バラエティ」や「キャラ」といったお約束のヴェールの効果が薄まり、安全弁が外れたかのように「リアル」が要求される。ディスプレイの「あちら側」と「こちら側」のあいだの振動は、ネットメディアの双方向性を介してさらに高速化し、「リアル」をより切迫したものにするのである。

もう一点、2000年代の「リアル」言説を考えるうえで重要なことは、「リア充」という言葉の流行である。この言葉は、2005年頃から「リアルの生活が充実している人」を指すインターネットスラングとして広がったとされる。参考までに、Google社が提供しているキーワードの検索回数の推移が分かるグーグルトレンドで検索(2022/11/8 アクセス)すると、2000年代後半に検索回数が上昇し、2010年代を通じてこの言葉が定着していったことがわかる。

表5 「リア充」の検索回数の推移



ここでいう「リアル」(の充実)は、インターネットを通じた関係ではなく、対面における人間関係や趣味活動を指すことが多い。『知恵蔵』の「リア充」の項目によれば、「自らの生活と比較し、嫉妬や羨望の対象として『リアルが充実している』」とされる。実際、「リア充爆発しろ」、「リア充氏ね」などという自嘲的なスラングとしてネット上で用いられることも多く、羨ましい、妬ましいという感情の諧謔となっている。このとき「リアル」という対面関係を中心とした生活の充実、ある種の「理想の姿」として立ち現れることもある、という。

お金もなく、恋人もおらず、仕事もうまくいかず、友達も少ないといった状態を強迫観念的に思い詰めている人にとっては、〈リア充〉は完璧な理想の状態にある憎むべき対象として、誇大に妄想されてしまうこともあるかもしれません(仲正 2010: 4 [ただしこの文章は編集部による])

「リア充」における「リアル」の内容は、家庭、職場、学校、友人関係、恋人関係、趣味活動など、多岐にわたっており、その用語の使用者によってなにを充実した「リアル」とするかは変化する。一方で、こうした「リア充」という用語が、親密な関係の充実に向けられていることが多かったことは、2010年代以降、「恋愛リアリティショー」が日本社会におけるリアリティ番組の主要ジャンルとして人気を博したことで無関係ではないだろう。いずれにしても、この時期の「リアル」という言葉は、目指すべき規範や目標の位置にあり、その意味では戦後日本社会における「理想」、「夢」といった用語と機能的に等価な位置にある。

4. 「リアルな時代」としての現代社会？

本論では、見田宗介の議論に対する疑問から、1990年代以降に形成され、流行した「リアル」言説を分析した。そして、現実とは区別される「リアル」が規範的な価値をもつ欲望の対象になった、と結論付けた(表6)。本来であれば、戦後日本における「夢」、「理想」、「虚構」などの言説が実際にどのように用いられ、量的に推移したかについて、本論と同様の方法で分析する必要がある。また、他のより適切なキーワードがありうることも排除されない。さらにこれらの分析は、見田への批判というよりも、それを補完する形で理解することもできるだろう。

現実	現実の反対語	
	プラスの意味	マイナスの意味
プレ高度成長（1945-1960）	理想	空想、妄想など
高度成長（1960-1975）	夢	悪夢、幻など
ポスト高度成長（1975-1995）	（リアル）	虚構
現代社会（1995-）	リアル	

表 6

たとえば 2010 年代の見田は、虚構の時代における「リアリティへの飢え」（2012：43-48）という議論を展開している。また 1985 年初出の評論においても、当時ノンフィクションがよく読まれていることに触れて「生活自体の根こそぎの虚構化の中で、大衆がリアリティに飢えはじめている、あるいはリアリティそのものが、新鮮なものとして感受されはじめているとみることもできる」（見田 1995：127）と指摘していた。1990 年後半以降に増加する「リアル」言説が、そうした「リアリティへの飢え」という需要に対応して供給されてきたとすれば、それはポスト虚構の時代として「リアル」の時代への移行を表しているのではないだろうか。見田は、虚構の時代を生きる人びとは「現実を愛さない」と述べた。しかし、すくなくとも 2000 年代以降の日本社会において——その内実がどのようなものであれ——人びとは「リアル」を愛している。だとすれば、「リアリティ」を希求する見田も、「リアル」を欲望する人びともそれほど大きな違いはない。1990 年代に二冊の著作を「リアルなもの」を求める人びとにむけて執筆したことは、きわめて同時代的な言説であろう。「『解体』論の図式を組み込んだ社会学の著作は、大衆消費市場には受け入れられやすい」（佐藤 2010：211）と考えれば、このことは見田の流行作家としての一面を表している。

ただし、遠藤が指摘するように「現実と虚構の溶解」を批判できていると思っている人は、自分は少なくとも「現実」の側にいることを定義上前提している」（2003：68）。その意味で、「現実」と「虚構」を単純に対立させ、その区別を判断できるという立場は、「素朴（ナイーブ）」であるか、「選良（エリート）」であるかだろう。ポスト高度成長期の日本を「虚構」が蔓延する世界と診断し、「リアル」を提示できる側にみずからを置いて、読者を導く——それは、見田のカリスマ性によって可能になっていたともいえるし、そのカリスマ性を支える位置取りでもあった。

一方で、1990 年代以降におきていたことは「リアル」という用語の流行であり、^{インフレ}凡庸化であった。だとすれば、見田宗介をカリスマにしていた足場——「現在は虚構の時代である」という診断——は揺らぎ、「虚構を越えて」という先導的な立場も特別なものではなくなる。ただし、それは見田の議論を全て損ねるものではないし、見田自身も望んだことですらある。たとえば、「リアル」の流行は、見田の予言（「リアリティへの飢え」）の正しさを示しているということもできる。また、流行現象としての「リアル」は「真のリアリティ」とは異なるという立場を堅持し続けることもできなくはない。いずれにしても、「虚構の時代」を越えようとした社会学者は、その外部ではなく、「リアル」の時代の内部にいたのかもしれない。

参考文献

- 東浩紀 2001『動物化するポストモダン』講談社現代新書
遠藤知己 2003『メディアそして／あるいはリアリティ——多重メビウスの循環構造——』『思想』No.956 岩波書店
吉川徹 2014『現代日本の「社会の心」——計量社会意識論』有斐閣
Lindemann, Danielle J., *True Story: What Reality TV Says About Us* (= 2022 高里ひろ訳『リアリティ番組の社会学』青土社)
村上圭子 2020『『テラスハウス』ショック①～リアリティショーの現在地～』『放送研究と調査』70巻10号 NHK 放送文化研究所
真木悠介 1993『自我の起源』岩波書店
見田宗介 1995『現代日本の感覚と思想』講談社現代文庫
—— 1996『現代社会の理論』岩波新書
—— 2006『社会学入門』岩波新書
—— 2012『現代社会はどこに向かうか』岩波新書
仲正昌樹 2010『〈リア充〉幻想』名月堂書店
大澤真幸 1996『虚構の時代の果て』ちくま新書
—— 2008『不可能性の時代』岩波新書
佐藤俊樹 2010『サブカルチャー／社会学の非対称性と批評のゆくえ』東浩紀・北田暁大編『思想地図vol.5 特集・社会の批評』NHK 出版
宇野常寛 2011『リトル・ピープルの時代』幻冬舎

注

- 1) 同論考は、1990年に書かれ、その後加筆されて改訂されている。ここでは1995年の版を参照した。
- 2) 大澤は、1996年の時点で「理想と夢」を集約したうえで、「理想の時代」を終わらせた連合赤軍事件と対置しつつ、「虚構の時代」の終わりを表す事件としてオウム真理教の「サリン事件」を論じている(大澤1996)。より正確に言えば、理想が(現実化をあきらめた)虚構に反転する前者と、虚構が(現実化を志向する)理想に反転する後者を対置しているのだが、「不可能性の時代」は、その約10年後に、そうした視点を継承して提示された。そのため、〈他者〉への希求と忌避というパラドクスもオウム真理教の分析のなかにすでに存在している。本論において興味深いのは、1996年の時点で、虚構のなかにある「現実への志向」をすでに指摘している点である。とりわけ、虚構とは、現実との対比において虚構でありうる(特定の現実基準に準拠することによって、虚構を虚構として取り扱える)。そうした対比が不可能になった時点で、それは虚構が直接そのままに生きられているという意味で、端的に現実である。すなわち「虚構＝現実」、「虚構の現実化」である(同上:271-273)。大澤は、どこかで虚構であることを知りつつ、その現実化にコミットしてしまうことを「アイロニカルな没入」と表現している。
- 3) この点、1996年の時点で大澤が「虚構」ということばに「ヴァーチャル・リアリティ」とルビを振っている箇所があるのは示唆的である(大澤1996:51-52)。
- 4) ここには見田流の社会意識論の困難がある。たとえば見田の社会意識論の批判的継承を進めた吉川徹(2010)は、詳細な計量データをもとに1980年代後半以降、階層・学歴などの属性による説明力が薄れ、「社会の心」が見えにくくなったという。見田が三区分を記した論考の初出が同時期であり、吉川は、これを再帰的近代における「個人化」のプロセスとしている。たしかに価値も多元化して、現実が一枚岩でなくなれば、(1)現実の反対語をとらえることは難しく、(2)その時代を共約する表現も見いだしにくい。そもそも特定の期間を「〇〇の時代」とくくって説明することの粗っぽさや、分析の精細度を下げたうえで表現することの意義を考える必要もあるだろう。本論もまた「リアル」言説の増大という局面だけを切り取って分析したにすぎない。ただし、社会の「全体」に漸近しようという視点を保持しつつ、そうした「全体語り」を反省的に捉えるという二重の立場をひとまずはとりたい。とりわけ本論は、現代日本を「リアルの時代」とする「全体語り」をしたいわけではない。むしろ、「リアル」という用語を使った「全体語り」の流行を分析することを通して、現代日本の変容の一部を明らかにする試みである。そのため、本論はあくまで「リアル」言説という「語り」の水準の分析となっている。一方で、見田やフォロワーの一部は「感覚」や「意識」の水準の変化を、いわば実態論的に分析している。したがって、前提とされている分析の水準が異なる。だが、言説もある実態の一部であり、それが規範的な価値や機能をもちうるという点で、両者は交差しうる。